
東方遊戯王～アテムが幻想入り～

クリスマスは中止にすべき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方遊戯王〜アテムが幻想入り〜

【Nコード】

N0533R

【作者名】

クリスマスは中止にすべき

【あらすじ】

冥界に帰ったはずのアテムが辿り着いたのは、なんと幻想郷の冥界だった。

そこから元の冥界に戻るには三か月もの間、待たされると言う。その間の暇つぶしとしてアテムは幻想郷へと赴き、様々な人妖と時に触れ合い、時に決闘し、時に弾幕ごっこをする。

そんな出会いを繰り返し返す内に、アテムにもう一つの選択——『幻想郷に残る』という答えが浮かぶ。

果たして、アテムが下す結論とは？

ターン1『遊戯王』（前書き）

本作品は東方と遊戯王のクロス作品となっております。

（しかし遊戯王要素はアテムのみ）

冥界に帰ったはずのアテムがたどり着いたのは、なぜか幻想郷の冥界。

手違いで幻想郷に辿り着いたアテムは何とか本来の冥界に帰ろうとして、幻想郷を彷徨います。

その過程で遊戯の王であるアテムが幻想郷の人々と触れ合い、時に決闘や弾幕ごっこしながら己を考えていくというストーリーです。

多少の性格崩壊や俺設定は生暖かい目で見守って下さい。

ターン1『遊戯王』

・サイレント・マジシャンのプレイヤーへの攻撃!!サイレント・バーニング! -

・ありがとう…相棒…オレの仲間… -

今までの全てが、走馬灯のように流れていく。

海馬瀬人とのデュエル。

デュエリスト・キングダム

決闘者の王国での相棒との結末。

デュエル・タワー

決闘塔での数々の死闘。

そして——相棒との、最後の決闘。デュエル

この光を越えた先に、俺の物語がある。

相棒とはまた違う、『光の中に完結する物語』——。

相棒の物語は、これから始まり、俺の物語はこれで終わる。

そうなる、はずだった。

「本当にすみません!なぜこのようなことになったのか——。」

今俺は、世間一般で言う『閻魔』の前に立っている。

しかし、『四季映姫』と名乗った閻魔のその姿は俺の想像する姿とはまるで違っていた。

「『邪神ゾーク』を打ち倒し、世界を救った王に——本当に、申し訳ありません！」

良くあるイメージの『鬼』のような姿をした閻魔ではない。かと言って、古代エジプトの閻魔の王である『オシリス』のような姿でも無い。

「いや、別に謝らなくても……それにしても、意外だな。」

「はい？」

「いや、こんな可愛い女の子の姿をしているとは……」

小さな背丈に、専用に仕立てられたであろう制服に身を包み。王冠？のような帽子に、閻魔の証である勺を持っている。なんというか、あれだ。

凛々しいというより、微笑ましいという言葉の方が似合う姿をしている。

「そ、そんな……恐縮です。」

照れているのか、頬を赤くする。

……うん、やはり可愛い。

「それより……早く元々行くべき冥界、つまり俺に仕えてくれた神官たちの居る冥界に連れていてくれないか？」

冥界の扉の向こうには、確かに神官たちの姿が見えた。セトやマハード、アイシス達の姿が。

つまり、その時点では確かに冥界の扉の行き先はそちらであつたはずだ。

「あ、いえ、それが……」

「もしかして……？」

いや、まさかとは思うが。

『出来ない』とか、『無理だ』という答えが返ってくるのか？

可愛いとは言え、仮にも相手は閻魔様だ。そんなはずは——

「誠に申し訳ありません、その、この世界には強固な結界が張られておりまして……入ることは出来ても、出ることは……私の力では……」

「……………」

「すぐに！すぐに結界の管理者に頼みますので、ほんの少しお時間を頂けると……」

思わず、憤慨しそうになったが……閻魔である、彼女の顔を見てその気は萎えてしまった。

ものすごく、必死なのだ。

自分の起こしたミスでもないだろうに、こんなにも責任を感じてしまっている。

そして、自分にとっては空想上の存在に過ぎなかった『閻魔』がここまでの礼を尽くしている。

ここで怒るのはお門違いというものだ。ここは、彼女に免じて少しぐらい、待った方がいい。

どうせ——自分の物語は終わったのだから。

「それより映姫さん。どれぐらい待てばいいんだ？一、二日、それ

とも一週間ぐらいか？」

「それが……」

映姫さんは顔を下に俯けた後、口を重々しく開いた。

「三か月は……」

「三か月！？」

「すみません！本当にすみません！結界の管理者は今、冬眠をしているのです！」

「と、冬眠！？」

冬眠と言うと、その管理者とやらは熊や兎みたいな者なのだろうか。いや、管理者というぐらいだ。流石にそれは無い。

だが、三か月も待たされるといふのはいささか長すぎるのではないだろうか。

「その間、俺は一体どうすればいいんだ？」

「ええつと、あの……」

「どこか、暇を潰せるような場所は無いのか？」

三か月の間、何もせずに一か所に居るといふのは余りにも暇すぎる。せめて、その間何か出来る場所は無いか？

決闘が出来れば最高だが、ここは冥界。デュエルモンスターズがあるはずが無い。

「幻想郷なら……」

「幻想郷？」

「妖怪や幽霊、吸血鬼などが今だ存在する場所なのですが……ただ人間には余りにも危険なので、お勧め出来ないので。」

妖怪や吸血鬼。本来なら『空想の存在』である者が存在する場所。つまり『ファンタジー』が実際にあるという場所というわけだ。ということは、デュエルモンスターズ界のような場所なのだろうか。

「興味があるな……そこには行けないのか？」

「行けることは行けますが……そこには人を取って食う妖怪が山のように居ます。気軽に行ける場所ではないのです。」

「いや、そこで考えたんだが……俺は今、生身の人間なのか？」

そこの辺りが実に怪しい。

今まで俺は武藤遊戯、つまり相棒の身体の中に存在していた。

そして、現在その身体は相棒が居て、俺という身体は存在しないはずだ。

実際、今俺の姿は相棒の中に居た時とは少し違っている。

肌はエジプト人のように、浅黒くなっていて身体には『アテム』だった時の黄金の腕環やマントを羽織っているのだ。そして腕には俺のデッキが納められた『デュエルディスク』。

古代的な衣装に機械的な『デュエルディスク』がちぐはぐな印象を持たせる。

「あ……！」

「やっぱり、今俺の身体は人間じゃあ……」

「その通りです。今あなたは、精神だけのもの……つまり幽霊のようなののです。」

「幽霊……」

精神だけの存在。

幽霊のようなもの。

いよいよ、幻想と言うに相応しい感じになってきた。

きつと海馬が聞いたなら『俺はそんなオカルトなど認めん！』とか言

うのだろうか。

「へえ……じゃあ、少なくとも俺は食べられる心配は無いな。」

——俺の腕にある、このデュエルディスク。

古代の決闘、ディアハに用いられた『ディアディアンク』では無いということとは……俺の精神は、無意識に『自らの剣』としてデュエルディスクを選んだということだろうか。

「そういえば幽霊って、普通は姿が見えないんじゃないのか？」

まるで身体がそこにあるかのように、はつきりとしている自分だ。世間一般で言う『幽霊』の定義が実際とは違うのかもしれない。

「いや、貴方はとても強靱な精神を持っています。ですから、そこまではつきりと姿が見えるのです。常人はまず透明で、姿はありませんので。」

「へえ……」

確かに、俺は『決闘者^{デュエリスト}』としての魂は誰にも負けない自信がある。そういうのも、精神の力なのだろうか。

「……じゃあ、俺にとって幻想郷はそこまで危ない場所なのか？」

「いえ、そこまでは……しかし、自衛する手段も持たずに行くのは危険です！」

「いや、それなんだが……」

デュエルディスクがこの腕にあった時から胸にあった、一つの予感。それがもし、当たっているならば……。

左腕のデュエルディスクから、一枚のカードを引く。

……見ずとも分かる。これは『ブラック・マジシャン』だ。

「ブラック・マジシャン召喚！」

デュエルディスクから白い光が溢れ、それが魔術師の姿を形作っていく。

その姿は——俺の、最も信頼するカードであり、かつて俺を支え続けた神官の姿。

「ハアッ！」

黒い装束に身を包み、魔力を増幅させる珠を乗せた杖を持つ黒魔術師の姿が現れる。

魔力に関しては詳しく無い閻魔でも、その身から溢れる黒い魔力を感じられるほどの力を持つ魔術師が。

「それでも、俺がまだ無力だと言うのか？」

「いえ、無力ではありません。ですが……」

「ですが？まだ何かあるのか？」

映姫さんから、俺にとって衝撃的な言葉が飛び出した。

「そこに行けば、恐らく冥界に戻りたいなどは考えられなくなると思うのです。冥界に戻りたいならば、幻想郷に行くのはお勧めしないのです。」

「……それほど、素晴らしい場所なのか？」

自分のことを心配してくれる彼女には悪いが、ますますそこに行きたくなってきた。

「はい。あらゆる意味で、『誰もが自らに素直』な場所なので。」
「自らに……素直？」

自らに素直とは、どういうことなのだろうか。
欲望や食欲、もしくは本能なんかに正直ということか？

「そうです。幻想郷では誰もが、自らに素直。言ってしまうえば我が儘な者ばかりなのです。……しかしそれ故に、美しい。」

それ故に……美しい？

「幻想郷では誰もが自分を偽ることなく、己というものを描いております。外界で生きた人には、幻想郷は余りにも魅力的に見えてしまふ。だからこそ、お勧め出来ない。」

誰もが、『己』を偽ることがない。
確かに、素晴らしい世界だ。

「……そこまで素晴らしい場所なら、行きたくなった。」

「そこまで言うならば、止めることはできません。冥界に戻りたくなくなったら、いつでも私に言っして下さい。——あなたも、それぐらいの我が儘を言える権利はある。それだけの事を、あなたはしたのだから。」

「考えて、おくぜ。」

「……では、三途の河の渡し守に連絡しておきます。渡し守の船に乗って河を渡れば、大きな門があるはずです。その門は普段は開かないのですが……開けておきます。そこを通れば、幻想郷に辿り着けます。これは少ないですが、路銀にお使いください。どうか、気をつけて。」

渡された小さな袋には、たつぷりと金属で出来たお金が詰まっていた。

何となく、古風な雰囲気を感じ出すお金だ。……三か月寝食に困らないお金だ。どれほどの価値があるか分からないが、100、200万に相当するぐらいにはあるのだろう。

「ああ、恩に着るぜ、閻魔様。」

「お礼など結構です。世界を救った英雄である貴方に対して、これは当然なのですから。」

別れの言葉を言い、俺は近くにある河へと向かった。

しばらく歩いてから——誰にも聞こえないような、小さな声で呟いた。

「……英雄、か。俺はそんな風に呼ばれるよりは、決闘者デュエリストと呼ばれるたいぜ。」

ターン1『遊戯王』（後書き）

初投稿です。

多少台本臭かったかもしれませんが、お許しを。

一か月に一回更新するかしないかぐらいの遅筆なので、余り期待しないで待つてもらえると嬉しいです。

ターン2『死神』（前書き）

一か月更新と言ったけど結局不定期投稿になりそう。
しかし、一か月より早く投稿出来たからセーフだよな？

ターン2『死神』

三途の河。死者はこの河を渡り、冥界に辿り着くと言う。

その河を渡らずに向こう岸、つまり彼岸に居る男は……王であった。

王に相応しい、黄金の装飾を身に纏い。

腕には王者の『剣』たる決闘盤デュエルディスクを備え。

そしてその肩には覇者たる証、威風堂々マントが下げられている。

そして、その男は。

「渡し守ってどこに居るんだ……」

河の岸边で彷徨っていた。

幾ら探しても、渡し守どころか船一隻見当たらない。

このままでは、待ちぼうけを食らうことになるのは確かだった。

待ちぼうけの王。語呂が間抜けである。

「……向こう岸までの距離はそう遠くない。……召喚して渡るか？」

六神官の一人であるアイシスは、『砦を守る翼竜』の背に乗り空を飛んだ。

そして、千年アイテムを見つけてくれたのだ。

——『千年アイテム』。

それが、どれだけの物なのかは、良く知っている。

『闇のゲーム』を執行するための呪具であり、それを持つ証のある者の『願い』を一つだけ叶える道具。

しかし、その超常たる力の源は——人の血と、命と、憎悪。
今でも忘れられない、その憎しみを背負った盗賊王の末路……。

だが、それももう自らの首に下げられてはいない。

常にあつた重さはもう無く、少々の違和感が残るのみ。

それも、じきに消える。

「しかし、今俺のデッキの中に、飛行が出来るモンスターは……」

自らのデッキは、普段のデッキでは無く『相棒』とのラストデュエルのために調整されていたものだ。

そのデッキの中には、空を飛ぶことが出来る『ドラゴン族』などのカードは無い。

いや、あるにはあるのだ。たった一枚だけ。空を飛ぶ、龍のカードが。

ただし、それは『オシリスの天空龍』だ。

「『神のカード』を、そう易々と召喚していいのか？」

ただ、すぐ近くの向こう岸に渡るためだけに。

自らの足として『神のカード』を使うなど、神の品位が落ちないだろうか。

「だが、いつまでも待つてゐるわけにはいかない。冥界の門が開けられている今、もたもたしてる暇は無いぜ……」

冥界の門は今、自分を通るために開けられている。

冥界に生身の者が入って良い場所ではない。

こうして居る間にも、誰かが誤ってその門を通ってしまうかもしれない。

ない。

生者が三途の河を渡れなくても、冥界に入ってきてしまうのは色々
とまずいのではないか。

「……背に腹は代えられない。仕方が無いか……」

デュエルディスクからデッキを引き抜き、その中から三神の内の一
つ『オシリスの天空龍』を取りだす。

このカードこそ、自らが初めて手に入れた『神のカード』であり――

――最後に勝利を託したカード。

もう、二度と使うことは無いと思っていたが……。

「オシリスの天空龍――召喚！」

冥界の空を覆う薄黒い雲海が、二つに割れる。

雲の狭間からは神々しい光が差し込み、神の顕現に相応しい厳かな
空間を造り出す。

冥界に、神が舞い降りる。

深紅の体躯に、漆黒の腹。

二つの口には総てを砕く、鋭利な白牙。

その口からは、誰もが平伏す龍神の咆哮が冥界に響き渡る。

そして――神を従える王は、その背に乗る。

「行け、オシリスの天空龍！」

神に言葉は不要。王の意思は言葉を介さず伝えられ、神はそれを実
行する。

声による合図により、神は王の意思を読み、それに応えるために行
動を始める。

龍神は冥界の空を緋色の身体で裂きながら、眼下の大河を見やる。その河こそが現世と冥界を分かち、死者と生者の狭間にある絶対的な境界。

それを己が意思で渡ることが出来るのは、死者の魂を運ぶ死神の渡し守のみ。

しかし王と、王が従える神はその例を外れる。

王が従える神は『冥界の神』。冥界の神が、自らの住まう場で自由が効かぬはずも無し。

王は、神は、いとも容易く大河を、『死者と生者の境界』を越えた。そして『王』は、生者の地へ足を降ろす。

王の意思を叶えた神は、満足したかのように双つの口から唸り声を上げ、静かに掻き消えた。

「……『門』は、あれか。」

三途の河の賽の河原。

そこから少し離れた所に、その門はあった。

王が一度通った門とは違い、その門は思わず見上げるほどに巨大。その門の間からは、外の世界の光が溢れている。

「早く行かないとな。誰かが通ってしまうかもしれないぜ……ん？」

ふと、視界の隅に人が……いや、『死神』が映った。

——寝ているが。

「起こした方が良く……のか？」

その死神は、枯れ木に背を任せて寝ていた。

組んだ腕の間には、一目で死神だと分かる鎌が収められている。正

直な話、鎌が自重でゆっくり揺れていて危ない。

「ま……いいか。気持ち良さそうに寝てるし。」

仮に寝てても死神だ。まさか鎌が刺さったぐらいで死ぬ訳もないだろ……

「痛ッ！」

「あつ……刺さった。」

鎌が腕の中で滑り、額に突き刺さった。痛そうだ。

「うお……痛い、痛い……」

鎌の先端をおでこから抜き取り、投げ捨てる。金属部が乾いた音を立てて、地面を転がる。

血が吹き出る額を抑えながら、鎌と同じように地面を転がりながらのたうち回る死神。

ものすごくシユールな光景である。

「……大丈夫か？」

「大丈夫じゃない！痛い！マジ痛い！大問題だよ！」

紅に染まった髪を振り乱しながら、ううゝ、とかおおゝ、とか言いながらごろごろと転がり続ける。

「……ん？あれ、どして迎えに行く人がこっちの岸に居るの？」

ふと気付いたように、転がり続ける死神が回転を止める。

目じりに涙を溜めて、ああ向きになったままそう言った。

「いや、いつまで待っても来なかったから……えっ？」

「えっ」

「なにそれこわい」

「えっ」

「……ちよつと待ってくれ。なんで迎えに来るはずの渡し守が、寝てるんだ？」

「えっ」

「誤魔化さないでくれ」

アテムに聞こえないぐらいに小さく舌打ちした死神は、胸を張りながら尊大に白々しく言う。

「……サボりだよ。どうして渡つてこれたんだい？」

身体を起こしながら、死神が衣服に付いたホコリや土を払う。

「別に……飛んできただけだぜ？」

「……どっかの魔法使いを思わせる言葉だね。ま、いいや。」

「魔法使い？」

「んにゃ、気にしないでくれ。ただの独り言だ。……最近の王さまは空も飛べるのか。すごいね。」

空を飛んだのは王ではなく、従えている神だが……それをわざわざ言うことは無い。

話を無駄に大きくするだけ。アテムはそう判断した。

「ああ……まあ、な。」

「全く、自分で飛べるならわざわざ私が運ぶことも無いのに……後

で映姫様に文句言つてやる。」

「サボったお前がそれを言えるのか？」

「……………さ、もうひと眠りしよう。現世行きの門はあっちだよ、あまり長い間開いておくとアレだから、早く通ってくれ。」

目を閉じたまま、指でしばらく門の方向を指で差した。と言つても、目に見える近さだから大して意味は無い。

「……………行ってくるぜ。じゃあな、死神。」

「ん。三ヶ月後、『何をしに戻ってくるか』……………楽しみにしてるよ。王様。」

そして王は、門を通り、再び現世に姿を現すために歩を進める。

もう一度光を潜り、『光の中に完結した物語』を再び始めるために。

ターン2『死神』（後書き）

そろそろ本格的に始まる、王様の物語。

しかしアテムだけだと何となく、遊戯王要素が足りない気がする。
その内誰かを幻想入りさせるかもしれない。

ターン3『闇の胎動』（前書き）

一か月……だよね、大体。

バクラ登場です。自分が一番好きなのは社長だけど、どうにもストーリーが破綻する予感しかしないから断念。

———
まだだ。

こんな所で……終われるか。

白も黒も、光も闇も無い何処かで俺は叫ぶ。

勸善懲惡？正義は勝つ？

そんな今時ありきたりなお涙頂戴の展開なんて誰が喜ぶ？

俺はそんな、つまらねえガキ向けのお話なんかを認めるつもりは断じて無え。

無の中で俺は叫び続ける。

それがどれだけ無様でも、虚しくても、汚くても。

俺という存在が闇である限り、俺はそうしなくてはならないからだ。全てを憎み、総てを闇に染める。それが俺の野望だった。

邪神という存在と、『盗賊王』としての存在。

そんなものは、もう欠片も残っては居ない。あるのはただの残り力。スミたいなものだ。

それは浄化されることも増殖することも無い。ただ、無という空間の中で漂うだけ。

それでも俺は、何とか存在を保つことだけは出来た。

そして、今日もこのクソ素晴らしい意味不明の空間の中を漂うわけだ。

いや、今日という言い方には語弊がある。ここには時間の概念は無い。

こうしている間にも永遠の時が過ぎているかもしれない、ほんの一瞬も過ぎていないかもしれない。

「あ……？」

喋った、……と思う。

何しろ肉体が無いから、この声が響いたかどうか、それを聞き取れたかどうかも分からねえ。

それよりも大事な事は……紫色だ。

目の前……これも目が無いから、見えているかどうかは分からないが——に、紫色の何かが見えやがる。

色の無い空間の中に、『紫』が存在する。……異常、としか言い様が無い。

「！？」

それは段々とこちらに近づいてきた。

それとも、ただ『紫』のそれが大きくなっているだけかもしれないが、そんなことはどうでもいい。

これは可能性だ。友情とか、正義とかを信じおめでたい奴らは『希望』だとかほざきやがるだろうから、俺はあえて『可能性』という表現を使う。

その『可能性』はどうやら、すぐるだけの価値のあるものらしかった。無を呑み込み、浸食し始めたのだ。

と言っても、無を呑み込んで何にもなるはずがない。それは0であり、何かに0を足しても変わるはずはないからだ。

しかし、その『紫』の目的は無を取り込むことでは無く、どうやら俺のようだった。

段々と、俺が認識する『無』を取り込みながら『紫』が近づいてくる。

その『紫』は……一言で言うと、『混沌』とした『紫』だった。

様々な『紫』色をぶちまけたかのようなぐちゃぐちゃした色を主とし、大きな『目』のようなものがそこかしこに散乱している。

「美的センスを疑うね……まあ、俺個人の評価としては悪くはないがな……」

闇のゲームの空間も、だいたいあんなものだ。

意味も分からぬ、いわゆる『まとも』な奴なら嫌悪感を抱くだろう空間。

その空間は、無を大方取り込みいよいよ俺をも呑み込み始めた。

「ま……これ以上悪い所に行くことは無いだろうよ……」

俺をここから連れ出そうとする奴が……あるいはそういう『意思』が、何を考えているのかは分からねえ。

ただ、俺がすることはその場所を闇に染めるという事だけだ。

それが出来なければ、俺の存在意義は無い。

精々、俺をここから引っぱり出した事を後悔するがいい。

俺は元々——闇そのもののなんだからよお……。

「そうなのかー？」
「！？」

どうしようもない程に退屈な世界から目が覚めた時、俺は闇の中に居た。

何もかもを隔絶した、暗黒の揺り籠の中。

そこは一筋の光も入り込む隙間は無く、全てが純粹や闇で満たされていた。

全てを闇で塗り潰した空間は、素晴らしく心地良い。

クソみたいな光の暴力に晒されたまま、一切何物にも触れなかった身体に闇が沁み渡り、傷を癒す。

闇は俺の糧であり、力の根源だ。闇こそが俺の存在理由。

「テメーは……いや、ここは一体……？」

しかし、この闇の中に居るのは俺だけでは無い。

闇は孤独。他人と利害関係以外で付き合う事など決してない。

それ故に、目の前の誰とも分からぬ5、6歳ほどの背丈のチビが邪魔臭かった。

「ルーミアちゃん、どうしたの？」
「んー、なんか闇の中にねー……」
「闇の中？」

闇の中に、またしても不純物が混じり込む。

黒い空間の中に、色鮮やかな緑と、瑞々しい肌色が入り込む。乳臭い、まだ世の中の光しか知らないであろう無知なガキだ。

「……………えーと、ルーミアちゃんが……………もう一人？」

「何訳の分からないことを言っただけだ。……………散れ、消えろ。」

自らの疲労が大きすぎて、動くことも出来ないという事実心底イラつく。

出来ることと言えば、精々この闇の中で漂い続けることだけだ。大して、さっきと出来ることは変わらない。嫌気がする。

「誰なのだー？」

「貴様らに名乗る必要なんて無え！分かったらとっと消えろ、クソガキ共！」

「ねえ、ルーミアちゃん……………昨日、何か変な物食べなかった？例えば、体が二つに別れるような薬とか。」

「デメエら、一体何を言っただけだ！」

目の前のガキが訳の分からぬ事を口走る。

変な物を食べた？それに、さっきの『何とかちゃんがもう一人』とか。

……………ここで、ある事実気づく。体が……………小さい。

前に肉体を間借りしていた宿主の体と比べると、この体は小学生……………『5、6歳程度』。

「……………5、6歳？……………おい、待てよ……………」

自分の身体……………と言っても、もう肉体は無く、精神体だけの塊だが

……を良く見てみる。

手のひらは小さい。肌の色も黒ずんでおらず、健康的な白に近い色。その手を、顔に当ててみる。骨ばった感触は無く、柔く肌が押し返す。

その肌もまた、すべすべとした感触をしていて、とても男の物だとは思えない。

視界を上に向ければ、金に近い黄色の帯が掛かっている。

頭を恐る恐る触れてみれば、驚くほどにきめ細かな心地良い質感を持つ髪であることが分かる。

自分の体をぺたぺたと触る事に目の前のガキ二人が奇異の目でこちらを見つめる。

ショートの金髪に、アクセントの小さな赤いリボン。

黒い服。……目の前に居る、クソガキと瓜二つだ。

自分の頭を探れば、目の前のガキと同じ位置にリボンのような布の感触。

「い……一体何がどうなってやがんだ……！？」

「……………」

「おい！これは一体どういうことだ！？」

「……………わはー」

「……………ハア？何意味の分からねえ事……………」

「わはー」

「…………と、とりあえず逃げようルーミアちゃん！こいつ、なんか危ない感じがする！」

緑のガキが、金髪の子ビの首根っこを掴み上げ、半ば引きずるようにしながら走っていく。

背中に生えた羽は飾りなのか、それとも飛ぶという行為が出来るのに、それを忘れるほど慌てているのか。

——何か、違和感がある。奴らは離れていつているはずなのに、

全くと言って良いほど、その距離感が無い。

「何だ……こりゃあ……？」

ガキ共は俺から離れているはずだ。現に、目の前には少し息を荒げながら金髪のカキを引っ張る緑のチビが居る。

だと言うのに、一向に奴らと俺の距離は遠ざからない。奴らが止まっているはずはない。——という事は。

「……ありえねえ……こんなガキが……これほどの闇を！？」

俺は闇の中を漂っているだけだ。闇が動けば、その中の俺も動く。そして、その闇が動いていると言う事は……この二人の内のどちらかが、これほどの『闇』を無尽蔵に垂れ流しているということになる。

そもそも、可視出来る程に高純度の闇はただの生物からは生まれなはずだ。

だが……現に、それは起きている。間違はなく、このガキ二人のどちらかが……？

「！？ちよ、ちよっと……追ってこないで下さい！」

「あ……ああ、俺はこの闇の中で休んでるだけだ。——別に、お前らに何かしようって訳じゃねえ……」

これほどの闇を放てる者はそうそう居ない。居ても邪神教の大神官クラスだ。

見た目のナリはただのカキだが、この二人の内の……恐らく、緑のキれる方は齢数百を越える闇の大神官……！

金髪のチビはどう見てもそんなタマには見えない。ただの無知なガキだ。

「闇の中で……休む？」

金髪のチビは言っている事の意味が分からないらしい。まあ、こんなことを言っても分かるような奴ではあるまい。

今の状態で、闇の外に出ればそのまま消滅は間違いない。せつかく出られたつてのに、またあの変な空間に逆戻りという訳だ。

この闇を消されては困る。ここはしっかりと説明するべきだろう。

「俺は断じてそのチビじゃあねえ。今はこんなナリだが、俺は大邪神……の魂の一部であり、元盗賊だ。俺は闇その物で、闇を取り込み、力に出来る。」

「大邪神……？」

……緑の奴、なぜか最後に疑問符を付けやがった。……俺の事を、本当に分かっているのか？

「神様ってことは、あなたも山の上の奴らの仲間なのかー？」

「山の上？一体テメエらは何意味の分からねえ事を何度も何度も……」

その時、緑が口を開き、

「『幻想郷』……」

奴は、俺の知らない『幻想郷』という単語をおもむろに呟いた。

「———という言葉を、知っていますか？」

「……いや、知らねえが……」

「なるほど、という事は……外の世界の人ですか。」

外の世界。またも意味も分からぬ言葉。
そのままの意味で言えば、外にある世界。……ますます意味が分からなくなる。

確かに、多世界解釈というものは闇の歴史の中に存在する。

通常の方法では、どうやっても辿り着けぬ、隔絶された他の世界。コインの表と裏のように、交わる事こそ無くとも、平行しながら極めて近い位置に存在するそれ。

だが、そんなものは下らないお伽話だ。それに、もし存在したとしてもどうやって他世界に行くというのか。

「外の世界……だあ？」

「ええ、そうです。ここは、あなたの今まで居た世界とは違う『幻想郷』という世界です！」

そして、この世界には魔法、神、妖怪、幽霊、妖精……外の世界では『幻想』と呼ばれる様々なものが実際にある世界なんです。」

残念ながら、神と幽霊は経験がある。……まあ、どうでもいいことだが。

さて、この闇の大神官？が言う事には、ここは『幻想郷』の言葉通り、ファンタジー溢れるいかにも平和ボケした奴が喜びそうな世界というわけだ。

「ほーお……中々面白そうな場所じゃねえか……ま、俺には関係の無い事だがな……」

妖怪だろうと神だろうと、俺の真の姿、大邪神ゾーク・ネクロファデスに勝てる者など居るはずが無い。

このままこの闇の中で力を蓄え続けられ、いずれは回復し、動けるようになる。

こんな巫山戯た姿になっている必要も無いだろう。

そうすれば、後はこの世界の住人の闇を集め、大邪神となり世界を破壊し尽くすだけだ。

あの邪魔な王サマもここには居ないはず。……まあ、今は休むのが一番大事だ。時間は山ほどある。考えるのはその後でもいいだろう。

「あれ、余り驚かないんですね？ちなみに私は妖精で、こっちのルミアちゃんは『闇を操る程度の能力』を持つ妖怪なんですよ。」

「……何？『闇を操る』だと！？」

ちよつと待て……まさか俺は、とんでもない思い違いを……？

背中に羽が生えているのは奇形化させているからではなく、ただ単に妖精だからではないのか？

この闇は大神官が生み出しているのではなく、ただこのガキの『闇を操る』だとか言う能力で発生しているだけなのか？

「これほどの闇を……こんなクソガキが……？信じらんねえ……」

『能力』だから出来る……闇とはそんな軽々しいものじゃあない。

闇とはそんな簡単に放出できるものではない。人を、敵を、全てを憎み、怨む者のみが放てる最強の力だ。

それは国を、世界を包み、底無しの沼のように人々を自らの闇に引きずり込み続ける。闇そのものが消えるまで。

それを……そんな闇を、こんな純真そのものなガキが出して良いものか。

だが事実、闇は放出されている。それも無尽蔵とも言えるほど。

そして、それに助けられている……いや、それ所か命を救ってもらっているのもまた事実。

認めたくはねえが、事実を事実ではないと目を背けるわけにはいかない。

「まあいい。……俺はしばらく、この闇の中に居る。少なくとも今日一日は、決してこの闇を消すな。」

「……なぜなのかー？」

……本当、信じらんねえ。

こんな抜けた奴が、闇を出せるとは。

見てみれば、何も考えていないようなぼけーとした顔付き。

何故、俺はこいつとそっくりな格好をしているんだ？こいつの闇を取り込んでいるからなのか？

——情けねえ。俺は、こんなガキに生かされているってワケか。相手が今、ここで闇を消せばそれまで。他人に命を握られてるといふのは、中々良い心地がしない。

「俺は今、物凄く弱っている……情けねえ事にな。この闇が無ければ、命は無いも同然だ。」

「そうなのかー、……んー……分かったのかー。」

……今のは、了承したという事で良いのか？

俺を生かしておくことがどういう事か……まあ、俺がどういう存在かも知らない奴にそれを言った所で、どうにもならないだろう。

「えーと、その……名前、何て言うんですか？」

そう言えば、まだ俺の名を名乗ってないねえ。

一応、相手には命を助けられている身だ。名乗っておかないなど、流石に無礼が過ぎる。

「俺の名前……」

……どう名乗るべきか。

バクラ、ゾーク、獺良了……あるいは本当の名前では無く、偽名を使うか……

——いや、『獺良了』は俺の名前ではない。あくまでこの名前は身体を借りていた者の名前に過ぎない。

「……バクラだ。俺の名前は……バクラ。」

やはりここは、盗賊をしていた時に名乗っていた……一番、自分が『自分』だと思える名が良い。

こういう場所で嘘を付くのは……性に合わない。

それに……どうせ、嘘など腐るほど吐いてきている。こんなになつてまでも、更に付く必要は無い。

「バクラさん……ですか。あ、私は大妖精、皆からは『大ちゃん』って呼ばれてます。」

「よろしくなのかー。」

これからも、こいつの生み出す闇が必要になる時が何度かあるだろう。

そのためにも、この『闇を操る能力』だとかを持つ妖怪、ルーミアと。

「ああ……ま、しばらくこの中で世話になるぜ。宜しくなあ……」

こいつのお友達であるこいつと仲良くやって行かなくてはならない。少なくとも、大邪神ゾーク・ネクロファデスに成る事の出来る闇の力を得るまでは——。

ターン3『闇の胎動』（後書き）

すみません。遊戯王OCGに熱中してて投稿が遅れました。
でも、念願のフォーミュラ・シンクロンも引き当てたし遊星デッキ
の完成も見えてきました。

クエーサーを召喚出来る日も近い……

相変わらず投稿は遅いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0533r/>

東方遊戯王～アテムが幻想入り～

2011年8月9日10時28分発行